

奥村さんの早すぎる死を悼む

病が進んでいることは誰の目にも明らかだったが、あまりにも死は早すぎた。ボクシングで鍛えた強靱な身体を持ち、闘病中も「命に関わるものではないから」と、常々奥村さんは言っていたではないか。まだまだしたいことも、なすべきことも、山ほどあったろうに。私も話したいこと、聞きたいことがあるのに。彼は人に優しく、理性的判断のできる人物だった。しかしその反面鋭敏な感性を持ち合わせていた。酔って地下の居酒屋で尾崎豊を歌うとき涙を浮かべるのが常だったが、いったいあの涙は何だったのだろうか。

奥村さんの『反デカルト的省察』（1987年）は、その大胆なデカルト批判によって私のデカルト観を一新させてくれた。デカルト自身の「生の利益 *usus vitae*」という概念を逆用してその哲学そのものを崩そうという斬新な構成、それが成功するには相手の隙をつく緻密な分析力と相手の力を自らの力に変えるしなやかな表現力が必要である。彼のこの優れた能力は、哲学にとどまらず、会議の場でも遺憾なく発揮されたものだ。しかし、今となってみれば、この書はむしろ彼の生涯を予兆していたのだという感慨に襲われる。哲学と実人生とがこれほどに緊密に結びついた書物はそうざらにあるのではない。「〈釘づけ〉になった身体」という概念いや感覚を論じ、「健やかな身体」の希望にあれほどのスペースを割いていたのも、今なら理解できる。

奥村哲学は身体の哲学である。そして、それがとる立場は、懐疑的、相対主義的な功利論である。彼の造語を借りれば、合理ならぬ「合利」がその哲学の根底にある。

「〈知〉は〈利〉に基づき、〈利〉は〈生〉のためにある。そして〈生〉とは『固有の身体』とともに現実の世界に生きることである。」

彼は早熟と言えるほどに、人生の知に通暁していたのである。唯一の絶対的真理というイデオロギーには懐疑的だったのである。そのような主張をなす者のうちに人生の危うさを直感していた。真理

なるものは「生の利益」からしてわれわれがそうと「定めた」ものにすぎない。そうであれば、そこに知についての「自己欺瞞」あるいは「生の計略」の影が見え隠れする。しかし、それこそはわれわれが生きるために必要なものであり、かえってその自己欺瞞に無自覚に生きるのであれば、悪しき絶対主義を生むことになろう。そう、彼は主張する。

「生の利益」を図るものは感覚であるが、そのなかで奥村さんがこだわったのは〈不調の感覚〉であった。それはその痛切さ、否応のなさによって、私の「生の利益」に密着して私の身体を支配するからである。

「現実について真に知ろうとすることがあくまでもわれわれにとっての『生の利益』に踏みとどまることであれば、現実について知ることは、何よりも、〈不調の感覚〉が示す〈否応のない現実〉としての『私の身体』の存在の承認から始まる。」

このことを承認したうえで、そこから、彼は生きて、現実についての豊かな哲学を書き始めるはずだったのに。あまりにも口惜しいことだ。

(海老澤善一)



奥村敏教授 遺影

略 歴

- 一九七一年三月 東京大学文学部哲学専修課程卒業
- 一九七六年三月 東京大学大学院人文科学研究科
哲学専攻博士課程満期退学
- 日本学術振興会奨励研究員を経て
- 一九七七年四月 愛知大学文学部講師就任
- 同助教授を経て
- 一九九三年四月 同教授
- この間、フランス・国際哲学コレージュにて
研修（一九八八年）
- 一九九七年四月 愛知大学文学部長就任
（二〇〇〇年四月まで）
- 他に監査委員、評議会委員などを歴任
- 二〇〇三年八月十八日 逝去

主な業績

- 《著書》『反デカルト的省察』理想社 一九八七
- 《論文》「マルブランシュの創造論(I)」「(II)」文學論
叢六八〇七〇 一九八二、「フランス機会原因論
の成立と世界統宰の問題」文學論叢八一 一九八
六、「大哲学者の亡霊 デカルト」理想 一八九号
- 理想社 一九八九